リオシュタルテの使い魔

motomi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リオシュタルテの使い魔

【Ｎコード】

Ｎ７３３９Ｏ

【作者名】

ｍｏｔｏｍｉ

【あらすじ】

目が覚めたら猫耳と尻尾がついていた。異世界に連れ攫われ、使い魔としてマスターに仕えることになった不運な女子高生のお話。

01

……世の中、なにが起こるかわからないって、あれ本当ですね。
野々宮一香（ののみやちか）、十七歳。今朝、目が覚めたら猫耳がついていました。
あ、ついでに尻尾も。
私、どうしたらいいのでしょうか。

※※※※

そりゃあ、猫は嫌いじゃない。むしろ犬より猫派な一香は、己の身に起きたことに驚愕を抱くより喜びを抱き、狂喜乱舞……するわけがなかった。
「なんで！？　なんで起きたらこんなもんが頭についてるのよ！」
受け入れがたい現実に、一香は当然のことながらうろたえ、何度も鏡を覗き込み、尻尾や耳を触った。
ふさふさと手触りの良い耳。すらっと伸びた斑の尻尾。どうやら一香は三毛猫だったようだ。
「ってちがーう！　おかしいでしょ、なんで三毛猫、なんで猫耳。しかもこんな中途半端に、どっかのエロゲみたく生えやがって！」
エロゲ、やったことあるのか、一香よ。
一香は鏡に映る己に向かって罵倒を吐き、がしがし、と地団太を踏んだ。それから「あああ、なんで、どうして」と部屋の中を歩き回り、また鏡の中を覗き込んだ。
パジャマ姿に、猫耳と尻尾。気が立っているせいで毛が逆立っているそれらを睨み、試しにピクピクと動かしてみた。
ふさふさ、ゆらゆら。
悲しいことに、尻尾も耳も、一香の思った通りに動く。飾りではない、カチューシャでもない、本当に“生えてきた”それ。
「うあああ、猫耳が生えるにともなって、人耳（ひとみみ）がなくなってるのが

更に怖い！」
誰か夢だと言ってくれ。
いっそのこと引っこ抜いてやろうと尻尾を引っ張れば、「うにゃあ！」後ろ下半身に激痛が走った。
「いった！　……ていうか、今私『うにゃあ』って言った！？　言葉まで猫化してきてるってどういうことー！」
半狂乱で騒ぐ一香。それだけ大騒ぎすれば声が廊下に漏れるのも当然で、大声を上げる一香に、両親が揃って部屋の戸を叩いた。
「ちょっと一香、一体どうしたの？」
「なにかあったのか、一香」
あった。あったけど、両親に見せられるのかこの醜態。答えは当然ノーだ。
「なっ、なんでもないっ！　なんでもないから入ってこないで！」
慌ててベッドに潜り込もうとするが一歩遅く
「一香！？」
がちゃ、と扉を開け入ってきた両親に、一香は猫耳アンド尻尾姿をみられてしまったのだった。
「……え、えっと、これは」
必死で誤魔化そうとする一香に、父は深いため息をつき、母はうっと口元を抑え涙をこらえた。
「一香」
「あ、あのね、これは！」
「一香、お前にもついにこの時が来たんだな……」
「はい？」
両親二人が深刻な顔をし、重い空気がその場を包む中、一香の場違いな声が室内に響いた。

※※※※

いつか、言うべきだとは思っていたんだ。

父親はそう言って話を切り出した。

地球とは違う、別の次元にある世界に、リオシュタルテと呼ばれる国がある。一香たちは、もとはその国の住人で、ネイラ族と呼ばれる一族に属していた。ネイラ族とは、地球でいう猫に近い種族で大抵の者は猫の姿で生き、死んでいくのだが、一族の中でも強い魔力――どうやらリオシュタルテには魔法というものがあるらしい――を持つ者は人型をとることができた。

「つまり、簡単に言えばネイラ族って“魔族”ってこと？」

「まあ、そうなるかな」

魔力をもつ猫――ネイラ族は、物語にでてくる魔族のように人と敵対する一族ではなく、むしろ人間に友好的な一族であった。人と契約を結び、使い魔としてその人に仕え、生活を送る。

私たちにも、地球（こちら）にくる前はマスターがいたんだよ、と父は言った。

一香の両親は、人型をとれることからも分かるように、一族の中でも高位の猫で、いわゆる王族の地位にあったらしい。リオシュタルテで仕えていたマスターも、同じく王族の家系にあたる人で、それが地球（こちら）に逃げてきた原因でもあるという。

「どういうこと？　その、マスター？　酷い人だったの？」

「いいえ、とてもいい人だったわ。初めは、ね」

当時リオシュタルテは権威争いのただ中にあった。王位に就いていた国王が病に倒れ、国は王弟派と、まだ幼き王太子派とに二分した。国王は実の子、王太子に国を継がせたがったが、けれどまだ十にも満たない幼子に、一体何が出来よう。しかも王太子は正妃の子ではなく、側室の生んだ子供。そのこともあり、王太子は確固とした後ろ盾を持つ王弟に押されつつあった。

「マスターは王太子派だったのだけどね、徐々に劣勢になっていく王太子に、なんとかして強い後ろ盾を用意しようと躍起になっていたの」

じきに、マスターは両親に王弟派の暗殺を命じ出した。
人を守ることが仕事であった父と母は、マスターの命令に眉を顰めたが、けれど主人の言うことは絶対。初めにそういう誓いを立てさせられているため、渋々とそれに従い大勢の人をあやめた。
「マスターは、どうしても王太子に国を継いでほしかったみたい」
「でも、そんな、人を殺してまで王太子を王位に就かせるなんて間違ってる！」
「政争というのはそういうものだわ」
どこか諦めを含んだ声で母はそう言って、目を伏せた。
「けれど、ついに限界が来た」
きっかけは、生まれたばかりの一香を、マスターが王太子に差し出せと言ってきたことだ。
「私！？」
三毛模様の耳がピンと揺れる。
「ネイラ族に、三毛模様の猫はめったに生まれないの」
「え？」
ネイラ族は基本的に黒と白色の猫が多い。ごくたまに茶の猫も生まれたりするが、大抵は皆一色きりの猫で、まだら模様で三色も有する猫は非常に珍しいのだ。
「三毛猫は神の使いとも言われてね、リオシュタルテでは建国神話に登場するくらい神聖な猫として崇拝されているの」
そして、両親のマスターはそれを利用しようとした。
三毛模様で、しかも人型になれる一香は、まさに神が使わした奇跡のようなもの。
その神に祝福されし猫を、使い魔とできたなら――神に後ろ盾を貰ったも同然。
「でも、人との契約は基本的に成人になってから、両者間の同意のもと行われるものなの。それなのに、」
マスターはその決まりを破って一香に王太子と血の契約を結ばせようとした。

「私たちは何度も反対したわ。一香はまだ幼い。生まれたばかりで魔力の融合などおこなったら、死んでしまうかもしれないって」
「しかし、マスターは聞いてはくれなかった」
「……だから、逃げてきたの？」
「ああ。ネイラは仮にも魔族だから、異世界を渡る術も知っていた」
禁忌の術だったけれどね。と母は付け足して笑う。
ちなみに、両親はこちらに渡る際、マスターに見つからないよう己の魔力と一香の魔力に封印を施したらしい。
だから、今、一香の向かいに座る両親の耳にも尻にも猫を示すものはついていないし、一香も昨日寝るまでは普通の人間のような外見をしていた。
「で、なんでいきなりその封印とやらが解けちゃったわけ！？」
しかも私だけ！　毛を逆立てる一香に、両親は。
「多分、“成人”したせいで魔力が顕在化して、封印にゆがみが出たんだと思うわ」
「意味、分からん……」
「ネイラは成人したときに初めて己の持つ魔力が定まるの。もちろん、それまでも身の内に魔力は潜んでいるのだけど、一定じゃないというか、変動的で、常に不安定な状態なのよ。だから、人との契約も成人になるまでしてはいけないことになっているんだけど」
「いやぁ、随分と美しい猫になったなぁ、一香……」
しみじみという父親に、「嬉しくないから」と耳を伏せる。
「これ、元に戻らないの？」
このままじゃ学校にも行けないよ。
「戻しちゃうのか？」
「あったりまえでしょ――！」
馬鹿なことを言うんじゃない、と返事をして、ふと気づく。
――今の声、誰？
低い、少しハスキーな甘い声。
父の声も低いけど、こんなにクラっときそうないい声じゃない。

恐る恐る部屋の入り口に目をやると。
――誰。
なんともファンタジーな格好をした不法侵入者がそこにいた。
「久しぶりだなぁ、ナツ族長。いや、元、か。今は貴方の弟君がネイラを率いているよ」
「――セイ、様」
父は立ち上がり、一香と母を隠すようにして侵入者――セイと呼んだ男の前に身を置いた。
「よくここがお分かりになりましたね」
「いや全く、探したよ。この十六年間、どれだけの世界を渡り、どれだけの人力を割いたことか」
まさか己の力を封印しているとはね、とセイは笑った。
嫌な笑い方。
笑みを浮かべながらも、その瞳の奥は冷え冷えと凍り付いている。
「成人した際の魔力の揺らぎで、ようやく辿り着けた」
薄い水色の瞳が一香を見やる。
「彼女は連れて行く」
「そんな――」
「まだ政権争いは続いていたのですか！？」
ぎゅっと一香を抱きしめる母に、「いや？」セイは首を振った。
「もう、とっくに終わったよ。叔父上が後を継がれた」
叔父上、ということはこいつ、王太子か。
紡がれる言葉にはなんの感情も見透かすことができない。
「では何故」
「イチカは私のものだ」
どこか聞きなれない発音で名を呼ばれ、一香はビクッと肩を揺らした。
言葉だけ聞けば告白のようにも聞こえるが、おそらくそういう意味ではないのだろう。
叔父上――王弟が王位に就いたと彼は言った。もしかして、改め

て一香を手に入れ、叔父から王位を奪い返すつもりか。
「イチカ」
差し出される手を、じっと睨み、
「か、勝手なこと言わないでください！」
気づけばそう口にしていた。
「な、なんなんですか、貴方！　勝手に人の家に入ってきて、誘拐宣言するわ、不法侵入だわ、偉そうだわ。私は、ただの女子高生です。特別な力なんてないし、そりゃ猫耳猫尻尾生えてきて、すごい驚いたけど、ネイラ族とか、リオなんとかとか言われてもさっぱり分からない！」
さっさと力を封印して元の日常に戻るんだ！　グッバイ非日常。さようならファンタジー。
「よく言った！　一香！」
「そうよね、一香、ほら、さっさと力封印しちゃいなさい」
わっと声を上げる父に、母が続く。
そう、封印をね、って……え？
「封印って、お母さんがしてくれるんじゃないの？」
キョトンと首をかしげると、
「自分でするに決まってるじゃない。母さん達、もう魔力ないもの」
封印なんて出来るはずがないじゃない、という。
「えええええ！」
生まれてこの方十七年。魔法なんか使ったこともない一香にいきなり無理難題を言う両親である。
「ふ、その驚きよう、できぬようだ」
びっくりしているうちに、セイがいつの間にか父を退け、すぐそばまでやってきていた。
魔法なのか、父は光る輪のようなもので拘束され、身動きが出来ないようにされている。
「まあ、無理もない。この世界は魔法がないようだし、今まで封印されていたというのだから、他の術すらもロクに使えぬのだろう？」

「うっ……」
痛いところを。
言う間に、母までもが拘束され、一香はじりじりと後退するしか術はない。
「一香！　なんでもいいから対抗して！」
無茶言うなぁあ！
「ええっと、」
魔法、魔法。
「ふぁ、ふぁいあーぼーる……とか……」
「なんの呪文だ？」
くす、と笑われ、一香は顔から火が出るかと思った。
「一香ちゃん、魔法を使うときは呪文を言わなくてもいいのよ」
「そうだ、とにかく頭に具体的なイメージを思い浮かべて、それを念じて具現化しろ」
そんなこと言われても！
後ずさる一香に、セイは獲物を見つけた野生動物のように面白そうな表情を浮かべ迫ってくる。
「うあああああん！　もう、なんでもいいから、出てぇええ！」
カメ〇メ波の要領で両手を前に突き出し、一香は叫びながらでかい白い光線を思い浮かべた。
と、
ポヒュッ！
間抜けな音を立てて、何かが出た。
おお！
と目を輝かせたのもつかの間、丸い火の玉みたいなそれはヘロヘロと宙を漂った後、ポンッ！　壁にあたって弾けとんだ。壁にはほんの少しのこげ後がついた程度だ。
というか、敵にすら当たってないってどういうこと！
涙目になる一香を、セイは問答無用で抱え上げ、「それじゃ、頂いていこうかな」と言って瞬間移動のごとく消え去った。

勿論、一香ごと。

※※※※

「放せ、放してー、変態！　誘拐犯、馬鹿、アホ、セクハラ、馬鹿王子！」

薄れていく両親と、リビングの風景。それが完全に消え去った後、一香は見慣れぬ西洋風の一室にいた。立派なソファとテーブル、火のついていない暖炉と、大きな……寝台。

「いやあああ！　家に戻して！」

急に危険な香りが込み上げて、一香は思いっきりジタバタと抱えられた身体を動かした。

「こら、暴れるな」

これが暴れずにいられるか！

荷物のように肩に担がれている今現在。抑えられている足で必死にセイの胸を蹴ったり、その背にぎゅっと爪を立てる。が、それでもセイはバランスを崩すことなく歩みを進め、やがて先ほどちらと見えた寝台に一香の身体を下ろした。

「イチカ、私の使い魔となれ」

「絶対にいや！」

政権争いに巻き込まれるなんて真っ平ごめんだ。そうでなくとも、平等な世界で育った一香にはご主人様ーなんて人を敬い、それに仕えるなんて想像もできない。

「それでは、仕方がないな」

言いながら、セイは諦めるでもなく両親を拘束した光の輪で一香の手首を捉えた。

「ちょっ何す――っ！」

ブチッとパジャマの襟元が強引に開かれる。その勢いで丸いボタンがどこかへ飛んでいくのが見えた。露になった首筋にセイは歯を立て、まるで吸血鬼のように一香の肌に噛み付いた。

「いっ……」
尖った犬歯で肌を破られ、そこから流れ出た血を舐めるように吸われる。
血――血の契約！？
「いやっやめて！」
もがくが、セイに身体ごと押さえつけられびくともしない。やがて、必要な量血を吸ったセイは顔を上げた。口の端に、一香の血が滲むようについている。それを片手でふき取った後、セイは傍らの卓にあったナイフを手に取った。
「なに！？」
突然目の前に晒された刃物に、一香は体を強張らせる。が、セイがそれで傷をつけたのは己の腕だった。一香の血を吸ったときと同じようにそこに口をつけ、血を含む。
血の契約、魔力の融合。お互いの血を混ぜることが、それを意味するのだろうか？　青ざめながら、それを見守っていると、不意にセイがこちらに顔を寄せた。
また血を吸われる？
ぎゅっと目を閉じて首筋に降ってくるだろう痛みを覚悟したとき
「っ――？！」
一香の唇になにかが触れる。
それは動揺する一香の口を割り、ぬめる感触をともない、咥内に入り込んできた。驚いて閉じようとする口を、顎を掴んで固定して、鉄の味がする液体が喉に流し込まれた。
――コクン
唾液とともに含まされ、抗うこともできずに飲み込む。
その後も、セイはしばらくの間一香の咥内を蹂躙し、やがて満足したように離れていった。
「これで、お前は私の使い魔だ、イチカ」
呼ばれた名前に、一香の胸がドクンと高鳴る。
最初に名を呼ばれたとき感じた恐怖ではなく、キスを受けたこと

による恋情でも勿論ない（というか、今のはキスなのか）。
絶対の忠誠心。この人には逆らえないという、圧倒的な力。
息苦しさに滲む涙が、一滴、シーツに零れ落ちた。
「はい、マスター」

02

翌日。

使い魔として最初にさせられた仕事は、勉強だった。

「なんで、なんで勉強！？　なんで私が知りたくもないこの国の地理や歴史について知らなきゃなんないの！？」

「地理や歴史のまえに、まずイチカは国語からだけどね」

「どうでもいい！」

この国の文字を覚えたとして、それが一体なにになるというの。

魔力が関係しているのか、セイと契約を結んだせいなのか。一香は知らぬ間に――本人はずっと日本語で会話していると思っていた――リオシュタルテの言葉を習得していた。リスニングにも会話にも問題なく、また読み書きも“読む”方だけならスムーズにおこなえる。

「なに、この無駄な能力！？」

どうせ解読するならこんな訳の分からぬ国の言葉じゃなく、英語とかの方がよかった。そうしたら英語の授業でしょっちゅう先生に発音を直されて、皆のまえで赤恥かくこともなかったし、留学生で格好いいビルに笑われることだってなかったのに。

自動翻訳機付一香。某不思議こんにゃくを食べた気分で英語もなんでもペラッペラ。将来はきっと翻訳家か通訳ね。

「って馬鹿！」

将来もなにも、今の一香には一生“マスター”に媚び諂って終わる人生しか待ち受けていないではないか。この誘拐犯で破廉恥犯なマスターから、どうにかして逃げ延び、地球に帰らないことには『好きな人と結婚して、お嫁さんになるの』なんて小さい頃からの乙女的な夢だって叶えられないだろう。

「帰る！　私地球に帰るー！　お父さんとお母さんのとこに帰って、向こうで普通に平凡な女子高生やるんだぁ！」

こんなところで意味不明な異文化学ぶより、そっちのほうがよっぽどタメになる。
「イチカ、聞き分けのない子はいけないよ。お前はもう私のものなのだから、言うことをお聞き」
“保護者”面して言うんじゃねえ！
「問答無用で連れてきた人がいいますか、それ。聞き分けがないもなにも、誰だって反発するわ、こんな状況！」
どうか夢オチでありますように、百回以上繰り返して目を覚ましてみれば、相変わらずの非現実。神様は一香に試練をおあたえになった……。って、冗談じゃない！　ありえない世界にありえないマスター。というかマスターが一番受け入れられない。むやみやたらと色気振りまきやがって、この天然フェロモン男め。出会いが出会いじゃなかったら、きっと惚れていた。が、その変態な本性を、初対面後一分たたずに思い知らされた一香は、セイに対して反抗する気満々、仕える気なんてサラサラない。
「イチカ、勉強をしなさい」
「絶対、嫌！」
けれど、あらがう心とは反対に、体が机に向かって歩み出す。
血の契約、使い魔の契約を結んだ一香は、名を呼ばれセイに命令されるとどうしても逆らえない運命（さだめ）にあった。
「嫌、嫌だってばぁぁ！」
言う間に、勉強机はどんどん迫ってくる。漢字ドリルもといリオシュタルテ語ドリルの置かれたそれ。
「大丈夫、私がわかりやすく教えてあげるから」
家庭教師があんただって言うのが最も嫌なとこなんだよ！　にっこりと笑むセイは、ひどく美しい顔をしていたが、一香にとってそれは悪魔以外の何者にも見えなかった。

リオシュタルテの文字は英語の筆記体で書く滑らかな文字に似ている。カクカクした、とめ、はね、はらいの厳密な日本の漢字と違

って、文字を書くというより、螺旋を描いたり、丸を描いたり、波線を描いたり。脳みそはしっかり文字を解読するというのに、書く方はてんで駄目で。一時間後、一香の書き込んだノートにはミミズが一匹、二匹とのた打ち回っていた。

くそったれ……。

一香は全然上達しない己の文字書き能力と、繰り返されるマスターからのセクハラに、すっかり神経をすり減らしていた。

家庭教師然としたセイはたしかに“わかりやすく”文字を教えてくれたけど、でもその最中ことあるごとに一香の“猫”の部分にちょっかいをだしてくる。上手くかけなくて毛を逆立てる尻尾を上から下へ撫でたり、かすかな物音に反応し無意識にぴくぴくと動く耳に息を吹きかけてきたり（これは流石にキレて顔を引っかいてやった）。とにかくセクハラ、パワハラ、が当然のごとく行なわれ、一香はぐったりと机に顔を伏せた。

「も、だめ……」

ストレス過多のせいか、眩暈までしてきた。クラクラと回る視界に、これがあの朝礼集会なんかでよく倒れるやつのいる貧血だろうかと、関係のないことを思う。

「イチカ？　どうした？」

呼びかけられる声ははるか遠く、一香の意識はブレーカーが落ちるごとくブツンと途切れた。

※※※※

帰りたい、帰りたい。

お家に帰ってお母さんの美味しくないカレーを食べて、お父さんの面白くもないオヤジギャグに眉をひそめる。最近は反抗期であんまり相手にしてあげてなかったけど、でも、離れた今ものすごく恋しいのはやっぱり我が家なんだ。ごくごく平凡の毎日につまんない、と文句言ったこともあったけど、だからってこんな非日常を望んだ

わけでも、こんなセクハラマスターの使い魔になることを望んだわけでもない。断じてない。というか、異世界トリップなら王道らしく、格好いい王子とか騎士を出してこいよ。いや、一応変態マスターも王子様――だった？　現役？　――なのだけどさ。でも、頭に“変態”がついちゃうし。強引で、人の話聞かなくて、お家に帰してくれなくて、人の首筋に噛み付いて吸血鬼のマネなんかしてくるし。ああ、私、あの人の血飲まされちゃったんだよな、うえ、今からでも吐き出して無しってことにならないだろうか。使い魔なんて奴隷も一緒じゃん。命じられたら抗うこともできずに従って。お父さん達が仕えていたマスターも、そうして二人に人殺しなんかさせたんだろうか。

マスターはひどい。お父さん達のマスターも、ひどい。どうしてネイラ族は人に仕えて生きなければいけないの？　人同士の争いに巻き込まれて、道具みたいに扱われて。私の人生もそうなっちゃうんだろうか。

……絶対に地球に帰ってやる。服従して生きる人生なんてまっぴらだ。非暴力、不服従。ガンジー万歳。

でも、お家に帰るにはまずその術を知らなくちゃいけないんだよね。異世界渡り、だっけ？　禁忌の術とか言ってたけど、難しいのかな。火の玉一つマトモに出せない私に果たしてそんな難しい術ができるだろうか。いや、できなくても、しなきゃいけないんだけど。三毛猫は奇跡の猫！　って、言ってたし、多分できる。おそらくできる。というか、やる。やらなくては。絶対に家に帰って、平々凡々な日常を取り戻すんだ！　そのためにはまず魔法の習得と、マスターの説得と……。

「う、ん……？」

嫌なデジャヴを口元に感じ、一香の思考は突然に浮上した。

ぬめる感触と、生暖かい、なにか。

ピチャ、

水音が響き、それから咥内を這い回る物体の正体に気がついた。
「――！？」
お目覚めのキス……ってこんなに生々しいものだっただろうか。いや違う。絶対に違う。白雪姫も眠れる森の美女もこんな、舌を入れたディープなキスで目覚めてなんかいなかった。
「……起きた？　イチカ」
セイは目を覚ました一香に気づき、薄水色の瞳で一香の顔を覗き込んだ。白銀の長い髪が、一香の頬をくすぐる。
お前はいったいなにをしてるんだぁぁぁ！！
ごくごく至近距離にセイの顔があり、口元は唾液――うへぇ――で濡れ、は、と吐き出される息が色っぽく空気中に溶けた。
「は、マ、マス、タ……」
状況が飲み込めない一香に、セイは冷静な顔で言う。
「イチカはまだ魔力が安定していないみたいだね」
「まりょ……」
はい？
「ネイラは成人すると一定の状態になるのだけど」
はあ、それは昨日母に聞きました。
「イチカは今まで力を封印されていたせいか、成人の折、箍の外れた魔力が身体に馴染みきっていないんだ」
意味分からん。
「だからね、イチカの魔力はまだ不安定で、突然多くなったり、量が減ったりする状態にあるってことで」
「それが、なにか問題でも？」
その不安定な魔力が今のキスとどう関係があるんだ、マスターさんよ。全く無関係に人の寝込み襲ったなんていったら引っかくぞ。
「魔力が多い分にはなにも問題はない。でも、少なくなることは、とても危険な状態なんだよ。魔力は魔族であるネイラの命をつなぐもの。人で言う体力みたいなものかな？　魔力が極端に減ると、今のイチカみたいに貧血を起こして倒れる。幼い頃は体も小さい分、

不安定な状態で上がり下がりしても基本的には問題ない。量が減っても、それを受け入れる器が小さいのだから倒れるまでにはならないし、大きすぎる魔力は、水がコップから零れ落ちるように、自然と外に溢れ、勝手に消えていく。本来はそうして、成人するまでに魔力を慣らし、身の丈にあった量に調節していくものなんだ」

でも、一香にはその調節期間がなく、突然に身の内に潜んでいた魔力が封印という殻を破り外に出てきてしまった。形も大きさも定まっていない魔力はその時その時で不安定に揺らぎ、質量を変える。

「その減った魔力を補充する為、今、私の魔力をイチカへ移した」

なるほど、そのための口づけ……って、納得できるか！

「それって、その、口移し……じゃないと、できないの」

「うん」

爽やかな笑顔で肯定されるが、ひどく胡散臭い。

「握手とか、手と手で、いや、むしろ触れずに移すことは不可能なわけ？」

「うん、無理だね」

うそくせぇえぇ。

本当かよ、と顔をゆがめる一香を無視して、セイは二度三度その頭を撫でた。

「夕飯の支度ができているから、隣室へおいで」

「うぬぬぬ……」

至極不服ではあるが、確かにおなかは減っている。夕食、ということは気絶している間に昼食を食べ損なったいたようで、二食分の腹の虫が一香に空腹を訴えた。

こういうの、よもつへぐいっていうんだっけ。

並べられた夕食を前に、ちょっと躊躇った一香だったが、すでに昨日と今日、夕食と朝食をいただいてしまっている。他の世界の食べ物を食べると、元の世界に帰れなくなる。千と〇尋を思い出して嫌な予感がしたけれど、やっぱり空腹には勝てないのだ。それに、食べ物うんぬんの話で言えば、幼少期一香はこちらにすんでいたの

だし（といっても一年ほどだが）、多分、きっと平気だろう。平気であってほしい。
頭の中で不安と空腹とが争いを続ける中、結局その日の晩も、しっかりお食事をいただいたのだった。

※※※※

深夜、一香の部屋と続きの間になっているセイの部屋から話し声が聞こえてきた。昼間、昼寝ならぬ気絶してしまった一香は、なかなか眠れずに寝返りを繰り返していたのだが、その話し声に耳を揺らした。
獣耳になって以来、妙に性能の上がったそれは、いやにクリアにセイと、もう一人見知らぬ誰かの声を拾う。
「――拾ってきた猫はいかがですか、セイ様」
セイより少し高い、硬質な声が言った。拾ってきた、猫。つまりそれは一香のことか？
人を捨て猫みたく言いやがって。こちとらつい一昨日まで歴とした飼い猫――いや、女子高生だったんだ。いつか声の主を見つけ出して引っかいてやる。
しゃきん、とシーツに爪をたてたとき、セイの僅かな笑い声が響いた。
「最上の猫だよ、イチカは」
「三毛猫、だとか」
「ああ、幼い頃みたときとほとんど変わりない。美しい三毛模様をしていた。白と黒と茶。白い猫と黒い猫が夫婦になり子を生むこと事態珍しいのに、生まれた子がまさか三毛猫とはね。イチカは本当に、奇跡の猫だ」
「奇跡の猫……それで、セイ様は彼女をどうするおつもりで」
「ひとまずは一通りの教育をしなければならないだろう。イチカは何も知らない。リオシュタルテのことも、己の一族や、身の内に潜

む力のことも」
「力のことも？」
「魔術がね、使えないようだ。あちらは魔法の存在しない世界だから」
「では、魔力は」
「それはある。じゃなきゃ私はいつまでたっても彼女を見つけられなかった。ただ、イチカの魔力は幼子のように不安定でね」
そこで、セイはなにを思い出したのかクスリ、と笑った。
ひいいい、キモイ、キモイ、キモイ。
楽しげなセイに、硬質な男がため息を落とす。
「魔術の使えぬ使い魔などただの役立たずではないですか」
役立たず！　こいつ、さっきから本当に失礼なやつだ。
「まあ、そういうなリク」
セイが硬質嫌み男を窘める。
リクって名前か。よし、記憶した。絶対に忘れない。いつか探し出して、目にもの見せてやる。
「イチカが奇跡の猫であるのに変わりない。魔力が安定し、術を操るようになればきっとどの猫よりも優れた逸材となるだろう」
「ですが……」
「リク、私はこの十六年、ずっとイチカを探していた。僅かな魔力の揺らぎを嗅ぎとり、ようやく手に入れた。誰であっても、そう、例えお前でも、文句を言う権利はないよ」
「……申し訳、ありません」
硬質嫌み男リクは、そう言って引き下がった。声には多分に不服な響きが含まれていたけれど、セイのきっぱりと突き放すような様子に、何を言っても無駄だと思ったのだろう。
「話は以上か？」
「はい、夜分に失礼いたしました」
コツコツ、と規則正しい足音が響き、リクは部屋を出て行く。
「イチカ」

にゃ！？
突然名を呼ばれ、イチカは驚いて身を震わせた。え、今、呼ばれ、た？
とりあえずどうしていいか分からず返事をせずにいると
「イチカ、起きているのだろう？」
バレてるし……。
セイは返事をしない一香に、断りもなく部屋へ入ってきた。
セイと一香の部屋は薄いレースのような布一枚で隔てられている。その布を退け、セイはベッドに横たわる一香に歩み寄る。
狸寝入り、狸寝入り。
じっと息を殺して寝たふりをするが。
「イチカ、このまま寝たふりを続けるのなら、こちらも好きに振る舞わせてもらうぞ」
言うと同時にベッドが軋み、背中から抱きすくめるように温もりが触れた。
「ぎゃあぁぁ！　起きた！　起きました、マスター。一香只今起床いたしました！　だから、放して！」
ドント、タッチ、ミー！
けれどセイは聞こえないふりをして、そのまま腕に力を込める。
「一緒に寝よう、イチカ」
私は抱き枕かっ！
抵抗しようとした一香だったが、名前を呼ばれ“寝よう”の一言は命令として脳に響いたらしい。徐々にぼやける視界に、ちくしょう……！　悪態をついたところで、意識は途切れた。
「イチカ、ネイラの至宝。私の、なによりも大切な、愛しい子」

03

『拝啓、お父さん、お母さん。

お元気ですか？　一香は元気ではありますが、とても不機嫌です。リオシュタルテに連れ去られて早数日、誘拐犯は全く反省する気配がありません。それどころか、一香にリオシュタルテのことを勉強しろとかいって無理やりドリルの書き取りをやらせてきます。本当、このマスター死ねばいいのに。一香は別にリオシュタルテのことなんかこれっぽっちも興味ありません。そりゃ、生まれ故郷だから気にならないことはないけど、でも一歳の時に地球へ移り住んだのでしょう？　懐かしさもなにもありません。

むしろ地球が恋しい気持ちの方が大きくて、今は早くそちらに帰りたいと願う毎日です。

マスターは、朝昼晩、時間を問わずセクハラ、パワハラもしてくるし、一香のホームシックにも拍車がかかるというもの。本当、このマスター死ねば（略）。裁判所に駆け込めば軽く勝訴できるようなセクハラを平気で繰り返されて、一香の精神はもうズタボロ。このままじゃお嫁に行けなくなってしまいそうです。先日なんか抱き枕代わりにもされました。本当、このマスター（略）。一香は精一杯抵抗しようとしました。なのに、脳がマスターの言葉を命令と認識したらしく、逆らうことすら出来ずに朝まで熟睡です。勿論、起床後しっかり報復してやりましたが、思い切り顔にひっかき傷を作ってやったというのに、あっという間に治癒魔法で治されてしまいました。無念。いつか治癒魔法なんかじゃ治せないような傷（肉体的、精神的問わず）をつけてやろうと思います。

地球のお父さん、お母さんへ

二人の娘、一香より。異世界から愛を込めて。

追伸。

どうして手紙を書くときって敬語になってしまうんでしょうね？』

そこまで書き終えて、一香はつらつらと日本語で綴った手紙の最後にリオシュタルテ語のサインを記した。
数日前よりは幾らか見られるようになったそれ。大分ミミズっぽさが抜け、ぎこちないながらも文字として認識できる。
今回書いた両親への手紙は、セイが、一香の文字書き能力の上達のご褒美として用意してくれたものだ。ご褒美はなにがいい？　と聞かれ、一香が真っ先に返したのは「地球に帰りたい！」だったが、それはあっさり却下された。その後何度か押し問答を繰り返し、ようやく『定期的に両親に手紙を送れる』ということが今回のご褒美に決まった。
「マスター、書けたー」
書き終えた手紙を封筒にしまい、きちんと封も施した一香は隣に座るセイを振り返った。
一香が手紙を書いている間、セイは離れがたいからと隣に腰を下ろし、手紙を読むな！　と毛を逆立てる一香の言いつけにしたがって、珍しく、本当に珍しく、一香にちょっかいも出さず大人しく本を読んでいた。
「書けたか」
セイはそう言って、文字を追っていた目をとめ、一香を見た。
「マスター、本、何読んでたの？」
「これ？　これは、今度一香に教えるこの国の歴史の本。文字の方が上達してきたから、そろそろ地理や歴史に移ろうと思って」
言うセイに、うへぇ……またお勉強か。一香は顔を顰めた。
セイは読んでいた本に栞を挟むと、ソファから立ち上がり、隣室へ向かった。今一香たちのいる場所は応接間のような場所で、隣は書斎兼執務室のような造りになっている。そこと反対側のドアを開ければ二人の（こういうと物凄く誤解を招きそうだ）寝室になっていて、連れ攫われて以来、一香は寝室と応接間、そして書斎にしか足を運んだことがなかった。部屋の外に出ることは許されず、顔を

合わせるのもセイだけ。
話し声や物音を耳にすることはあるのだけれど、未だ一香はセイ以外の人間にあったことはないのだった。食事の用意やベッドメイキング、掃除なんかも、全て一香が別の部屋にいるときに行なわれる。別に知り合いがいるわけじゃないから誰に会いたいってわけじゃないけれど、セイ一人しか会話する相手がいないというのはひどく息の詰まることだった。
「マスター、なにしてきたの」
隣室から戻ったセイに、一香が訊く。
「ああ、リクを呼んで来た」
「リク？」
どこかで聞いたような名前だ。
「近くにいるらしいから、すぐ来るだろう。以前、お前が盗み聞きをしていた相手だよ」
盗み聞き！　人聞きの悪い。マスター、あれは聞こうとして聞いたんじゃなくて、声の方が勝手に私の耳に飛び込んできたんだ……って、そうか、リクってあの硬質嫌味男の名前だ！　一香のことを役立たずだ、なんだ、と罵った、失礼なやつ。聞いてないとでも思ったのだろうけど、大間違い。リクめ……ここで会ったが百年目（初対面ですらないけど）、ちょっとでも隙を見せが最期、思う存分引っかいてやる！
ニヤニヤと復讐計画を思い浮かべる一香に、セイはちょっと面白そうに口の端を上げた。

セイの言うとおり、リクはすぐに一香たちの部屋へとやってきた。
コンコン、と礼儀正しいノックの音が聞こえ、「入れ」リクが入ってくる。
硬質嫌味男リクは、セイより少し低い身長（それでも一七〇後半はある）の、無表情で愛想のない黒髪青年だった。濃紺のカッチリとした衣装に身を包み、肩の辺りに不思議な色をした鳥を連れてい

る。
――か、かわいいな、鳥。
燃えるようなオレンジと赤色の羽に、長くしなる尻尾。大きさは三十センチほどで、大人しくリクの肩にとまっている。
あとで触らせてもらおう、と密かに思ったとき、
「なっ、セイ様！　なんなんですか、この猫……！」
リクが動揺したような声をあげた。見ればリクの視線は一香に向けられ、入室時の無表情から一点、白い肌に赤みがかり、信じられないといった表情を浮かべている。
「なにがだ？　リク」
首をかしげるセイはわざとらしく言い、本当にわけの分からない一香は、この人もしかしてちょっとおかしい？　と憐れな視線をリクに送った。
なにせ一香はまだなにもしていない。引っかいて、噛み付いて、余裕があれば一発蹴りを入れてやろうなどと報復の手段を考えていたものの、まだ引っかくの“ひ”の字も手を出していない。のに、リクのこのうろたえ様はなんだろう。
二人の視線を集める中、リクは。
「なにがじゃありません、セイ様！　この、破廉恥な猫は一体どういうことですか！」
……破廉恥？
「どういうこともなにも、可愛いだろう？」
「かわっ、可愛くなど。まるで娼婦のような格好じゃないですか」
「娼婦！？」
リクから飛び出た言葉に一瞬呆然とするも、すぐに怒りが込み上げる。
――人を役立たずだ、破廉恥だ、あげくの果てに娼婦扱いとは！
ええい、けしからん、成敗してやるっ！！
赤面しながら、精一杯一香から目を逸らそうとするリクに、ついに一香はキレて襲い掛かった。

今日の一香の服装はフリフリのキャミソールにカーディガン、下はローライズの短パン、ニーソックスという出で立ちで、割と現代日本風な格好をしている。こちらに来て初め、セイに渡されたのはキャミワンピ一枚だったのだが（さすが変態）、ワンピース姿だと、無意識に尻尾を逆立てる一香は、知らず知らずのうちにワンピごと後ろの部分をめくって自らパンチラをしてしまうのだ。これに気づいた一香は悲鳴をあげてセイを引っかき、涙ながらに考えた解決策が、短パンニーソのスタイルだった。

なぜ短パンかといえば、そこはセイの趣味。男物の多いリオシュタルテのズボンを（こちらでは女性はめったにズボンをはかないらしい）、一香用に裾上げし、尻尾が出しやすいようローライズにしてくれたのはいいけれど、出来上がってみたら太もも丸出しの短いショートボトムになっていた。

足フェチか、足フェチなのか、ご主人……。

さすがにそれで生足は恥ずかしいと言うことで太ももまで隠せるニーソ――本当はタイツかレギンスが良かったが、尻尾が邪魔になるので――を要求し、今の姿になった。

ちなみに、リオシュタルテでは中世ヨーロッパ風の衣装が主流。こちらの女性たちはズボンを履くどころか、異性に肌を見せる服装はとてもはしたないものだとされているのだが、未だセイ以外の人間に会っていない一香はそんなこと知る余地もないのだった。

「こらこら、イチカ、それくらいにしておきなさい」

数十分、傍らで愉快そうにイチカとリクのやり取りを見守っていたセイはようやく口を開いた。

「うぅ――あっ！」

最初の一撃こそ、不意をついて食らわせることができた一香だったが、その後は魔法で防衛されてしまい、見えないバリアのようなものに全く歯が立たない。いっそのこと自棄になってとび蹴りを食

らわせようと助走して飛びかかろうとした瞬間、マスターからの喧嘩中止の命令を下され、無様に床に転げ落ちた。
「いった！」
不服そうにセイを睨むと、セイは一香から目を逸らし「悪いな、リク」と硬質嫌味男に向き直った。
「こんなに非常識な猫だとは思ってもみませんでした」
「なんだと！？」
「やめなさい、イチカ」
「うううう……」
セイに言われてしまえば、逆らうことも出来ない。一香はしぶしぶと引き下がり、代わりに八つ当たりでソファに蹴りを入れた。
「とんでもなくガサツな猫ですね」
「リクも、逆なでするようなことは言わないでやってくれ」
「ですが、このままではいつまでたっても外に出せませんよ」
「気長にいくさ。それで、お前を呼んだ用件なのだけど」
苦笑して、セイは話題を換えた。
そうだ、そんなやつさっさと用件だけすませて追い返してくれ！
リクはセイの言葉に、思い出したように連れてきた鳥――一香との交戦中もずっと優雅に肩にとまっていた――を見やった。
「紅の二番でよろしかったですか？」
「問題ない。おいで」
差し出されたセイの腕に、炎色の鳥が飛び移る。
うわぁ、いいな、それ、私もやりたい。
可愛らしい鳥に先ほどの怒りも薄れ、一香はそわそわとセイの腕にとまる鳥を見つめた。
「イチカ、こちらへ」
「はい？」
もしかして触らせてくれるのかな。どきどきしながら近寄っていくと、セイがすっと手をだす。
「なに？」

握手でもしたいのか？
「そうじゃなくて、先ほど書いた手紙を出してごらん」
「手紙？」
ええっと、どこへやったっけ？　慌ててポケットを探り、周囲を見渡して。
「あ、あった！」
テーブルの下に落ちてしまっていたそれを見つけた。リクが来たせいで大事な手紙がこんなところに（濡れ衣）。埃を払い、皺になってないか確かめた後、セイに渡した。
「マスター、なにするの？」
もしやその鳥に食べさせるつもりか？　不安に眉を寄せていると。
「あちらの世界に送らせる」
言って、セイは鳥に手紙を咥えさせた。
「蒼き四龍島（しりゅうとう）の国へ」
鳥は一度頷くようにして頭を下げ、それから羽根を広げ、上空に飛び立った。
「あぶなっ」
天井にぶつかる、と思ったそれは、けれどぶつかる寸前で黒い穴のようなものが開き、それをくぐって鳥は姿を消した。その後、黒い穴は蜃気楼のように揺らぎ、見上げた場所は元の天井に戻る。
――異世界渡り。姿を消した鳥に、その言葉が思い浮かんだ。今のがそうなのだろうか？　一香が最も欲する、地球へと帰る術。でも。
「マスター、今の……」
禁忌の術だったんじゃないのだろうか。
呆ける一香に、言いたいことが伝わったのだろう、セイは軽く頷いて。
「手紙を送る程度なら問題ないよ。各世界はそれぞれ独立して成り立っていて、地球は地球、こちらはこちら、それぞれが理をもち、それぞれにルールがある。それを侵し、干渉することは絶対に許さ

れないけれど、イチカが両親に手紙を送るくらいなら、きっと大丈夫だろう」
きっと、ですか。曖昧ですね、マスター。
「あの鳥、魔族？」
「緋炎（ひえん）という。大人しいが気高い、炎を扱う鳥だ」
そんなことも知らないのか。責めるような口調でリクが言った。
お前には聞いてねぇ……。というか、まだいたのか。
嫌そうな顔をする一香から視線を移し、
「セイ様、私はこれで」
ペコリ、セイ限定でお辞儀をしリクは部屋を去っていった。
キーッ！　本当にむかつくやつ！
去っていく背にあっかんべぇをしていると、それを見たセイが笑みを漏らす。
む、何笑ってるんだ、マスターさんよ。そもそもあんたがリクを呼んだせいでこんなに嫌な思いをしたんだぞ。そりゃ、手紙を送ってくれたのは助かったけど、別にリクじゃなくて緋炎だけつれてくれば良かったんだ！
「イチカ」
なんだ！
「地球へ、帰りたいか？」
「は……？」
なにを当たり前のことを。急な問いかけに、一香はちょっと眉を顰めた。
帰りたいに決まってる。早く、早く帰って、こんなところおさらばしたいに決まってるじゃないか。修学旅行とかで何日間か家を離れたことはあったけど、こんな、来たこともない異世界なんかじゃない。日本国内だったり、外国へ行ったりしても、広く考えれば地球内だ。お父さんとお母さんだって、電話かければすぐに声聞けた。帰宅すればすぐに顔が見れた。
残酷な問いだ。聞くだけ聞いて、帰してなんてくれないくせに。

笑みを浮かべていても、なんにも優しくない。薄い水色の瞳は、最初あったときみたいに凍り付いていて、冷たい。
ガンッ
返事の代わりに思い切りその足を踏んで、一香は寝室へ逃げ込んだ。
大嫌いだ、マスターも、リクも、リオシュタルテも。
まだ何一つ知ることはないけれど。知りたくもない。記憶から消え去って、早く、このおかしな夢から現実に戻して。

※※※※

寝室に閉じこもり、夕食も食べずに布団に包まっていた一香は、きし、という寝台がきしむ音で目を覚ました。断りもなく回される腕。覚えのある感触。確かめるまでもなく、その腕はセイのものだ。
「イチカ、怒ったか？」
だからスト起こしてるんじゃないか。使い魔スト。現実からのスト。お勉強からのスト。嫌なことは眠って逃げてしまうのが一番。……まあ、起きた後の現実にまた落ち込んだりするのだけど。でも、寝ている間は何もかも忘れてしまえる。
「お前は帰れないよ、イチカ」
また、残酷なことを言う。
「帰さない、絶対に」
「嫌だ、帰る。絶対に帰る！」
自分を奮い立たせるように、一香は反論する。
「帰って、お母さんのご飯食べて、お父さんにドライブ連れてってもらうんだ。友達とはショッピングに行って、くだらない話して、テスト嫌だねー、なんて言いながら渋々勉強して。時々お小遣いから奮発してケーキ食べに行ったり。そういう、無駄だけど、大切で、平凡な時間を過ごすの。リオシュタルテのお勉強してる余裕なんかないんだから。もう二年生だし、受験だってあるし、勉強なんか嫌

いだけど、大学行かないとお父さん五月蝿いし。と、とにかく、これでも色々やることあるの。使い魔として、マスターに仕えている暇なんてこれっぽっちもないんだから！」
色々と論点がずれながら、それでもまくし立てる一香に、回された腕がきつくなる。
「お前は幸せだね、イチカ」
「はぁ？」
今、そんな話してましたっけ。というか、現在進行形で不幸なんですけど。主に、あなたのせいで。
呆けていると、後ろで身じろぐ気配がした。
「夕食、サイドテーブルに置いておいたから、食べてから寝なさい」
抱いていた腕を離し、一香の頭を二度三度撫でた後、セイは静かに部屋を出て行った。

０３．５（前書き）

３話の翌日のお話。短めです

03．5

次の日。

ドタン！　ベチ！　バタバタバタ、ドタンッ、ドテ！

「……なにをしているんだ、お前」

――はっ！　み、見られた！

何度も助走をつけては下手なジャンプを繰り返していた一香は、いつのまにか部屋に入ってきていたリクに訝しげな視線を送られた。

「昨日、緋炎が消えていった穴が気になるようだよ」

リクの問いに答えたのは隣室へ行っていたセイだ。朝食を食べ終えるなり書斎に向かったから、なんだろうとは思っていたのだけれど、どうやらリクを呼びに言っていたらしい。

こんな嫌な男昨日会っただけで十分なのに。早く用を済ませて帰ってくれないだろうかと、一香は眉を寄せる。

「穴って、次元の狭間のことですか？」

尋ねるリクに、セイが頷いた。

「大方、あれを通れば家に帰れるとでも思ったのだろう。今朝からずっと天井に飛び上がる練習をしているよ」

――ば、ばれてたのか。

今朝は早くに起き出した一香は、まだ寝ていたセイの目を盗み、一人特訓をしていた。今も、セイが隣室に行っている間ジャンプを繰り返し、何度も飛び上がっていたのだが、全てバレていたらしい。

「あんなにドタバタやっていれば、誰だって気づくよ」

不服そうにする一香にセイが言う。

昨日緋炎が消えていった穴――次元の狭間とリクは言っていたけれど、それを通れば家に帰れるんじゃないかと、まさにセイが言った通りのことを一香は考えていた。だって、緋炎はあの穴を通って

地球にいる両親に手紙を渡しに行ったのだ。とすれば、つまりあの穴は地球に繋がっているわけで、イコール一香もあれに飛び込めば地球に行けるのではないか。単純計算で考えて、一香は一生懸命天井の穴――今度緋炎が穴を開けた際に飛び込もうと、その練習をしていたのだった。

ソファや家具を使えばなんとか届くと思うのだ。一応、一香は今猫なのだし、脚力もそれなりに上がっているんじゃないだろうか。

「やめておけ、馬鹿猫。お前があれに飛び込んだところで迷子になるだけだ」

相変わらずの嫌み混じりで言ったのはリク。

誰が馬鹿猫だ、誰が！

「迷子になんかならないもん、私これでも方向感覚はいいんだから！」

馬鹿にするな！

毛を逆立てる一香に、リクはやれやれとまたも馬鹿にした様子で首を振る。

「そういう問題じゃない。次元の狭間は果てのない迷宮、異世界渡りを身につけたものしか渡れない途方のない場所なのだ。魔術の何一つ使えぬお前に、渡れるような簡単な場所じゃない」

諦めろ、と言われても、一香は天井を睨むのを止められなかった。そんな（セイに）都合のいい話、信じられるか。一香を帰さないようセイと組んで一香を騙すつもりなのだろうが、そうはいかない。迷うと言ったって、緋炎にくっついて後をつければ問題ない。道を知っている緋炎を見失わないように歩けば……

「イチカ、なにをたくらんでいる？」

ふぅ、と耳に息をかけるようにしてセイが一香の肩を抱く。

ちょっ！　この変態！

「リクの説明を聞いただろう。馬鹿な考えをもつのはおやめ」

「だって！」

信じられないもん、そんなこと。

「私は狭間に飛び込んで二度と帰ってこなかった者を知っているよ？」
そっと、声のトーンが低く落とされる。
「幸運にも戻ってきた者もいたが、すっかり気が狂い、精神を病んでいた。目は虚ろで髪は色を失い、言葉にもならない叫び声を上げて、数日後、自ら命を絶った」
……し、信じないぞ。
「ある者はガリガリに痩せて戻って来て、全身ひっかき傷だらけ。精神を維持するため痛みで気を保とうとしていたのだろうが、こちらに戻って来ると同時に事切れ、亡くなった」
ひえー。
「数十年さまようものもあれば数百年さまよい、ミイラとなって亡骸だけ戻ってくることもある。……私はね、イチカ。可愛いお前をそんな状態にはしたくないのだよ」
恐ろしい迷い人たちの話をそう締めくくった後、セイは優しく一香を抱きしめた。
――う、嘘だっ！　信じない！　誰が変態セクハラ誘拐犯のことなんか信じるもんか。
……でも。
一香は思う。
でも、もし、万が一、億が一、それが本当であったなら。　想像して、一香はちょっと身を震わせた。一香はまだピチピチの十七歳、日本の平均寿命の半分も生きていない自分が、セイの話にでてきた迷い人たちのようにミイラになる姿を。
「まあ、ミイラになっても帰ってこれるだけマシですけどね」
――意地悪！
追い討ちをかけるようなリクの言葉に、一香はとりあえず『緋炎でいく次元の狭間～終着地点地球まで』の計画を取りやめにしたのだった。
まだミイラにはなりたくないしな、うん。

04

「さて、それじゃ行ってこようかな」
セイのその言葉に、一香はソファを蹴る足を止めた。
『緋炎でいく～』が急遽とりやめになり、セイとリクの二人から散々脅しをかけられからかわれた彼女は、鬱憤をはらすためソファに八つ当たりのごとく蹴りを入れていた。傍らのリクが“馬鹿猫……”とでも言いた気な目で一香を見るので、ますます鬱憤が溜まる。
その間、セイはなにやらごそごそと寝室でやっていたのだが、ソファをズタボロにすることに夢中になっていた一香はさっぱり気づかなかった。
それで、戻ってきたセイが言うことには。
「イチカ、少しの間留守にするからちゃんといい子にしているんだよ？」
私は幼稚園児か。
セイはいつもの室内用の軽装に、薄手の上着を羽織って寝室から出てきた。
ラフな服装にプラスラフな上着を羽織っただけの全くもってラフな服装なのだけど。それでも外出するということで少しはオシャレを意識したのか、いつもはあまりつけないアクセサリーを身につけていた。左耳にピアスが三つと、右耳に一つ、それから右手に指輪が二つほど嵌められている。
（マスターめ、色気づきやがって）
珍しげにそれを見ていた一香が物欲しそうにでも見えたのか、セイはくすりと笑って右手にはまっていた指輪の一つを外し、一香の手を取った。
キラキラと光を反射して光る金色の指輪が一香の右手の薬指に嵌められる。
（おおー！　キレイ！）

「私が留守にしている間、イチカを守れ」
セイの言葉に応えるように、金色の指輪は色味を変え、白銀に青い模様の入ったデザインへと変化した。
「今の、魔法？」
白雪のように純粋に輝く白銀と、冬の空みたいに冷たさを帯びた薄い青。キレイだけど凛として気高く、人を寄せつけない寂しさがある。
（まるでマスターみたいだ）
指に嵌められたそれを何度か撫でるようにして触れる。サイズもいつの間にか魔法で調整されたらしく、ぴったりと一香の指におさまっている。
「気に入った？」
セイが聞くと、一香は視線も向けずにコクンと一回頷いた。
きらきらと輝く不思議な指輪。形はなんの飾り気もない、つるりとした輪っかの形をしているのだけど。青色の模様が角度を変える度、宝石のように色を変え、それがなんとも言えず綺麗なのだ。
「大人しく留守番していたら、留守中だけでなく、ご褒美としてイチカにあげるよ」
「本当！？」
勢いよく食いついた一香に、セイはくすと笑う。
けれどそんなこと全く気にならない様子で一香は「本当にくれる！？」とセイに聞き返した。
「ああ、あげるよ。リクと二人で仲良くお留守番ができたらね」
「わーい……って、え？」
ちょっと待て、マスター。今なんと？
聞き捨てならぬ言葉を聞いて固まる一香をよそに、セイは「後は頼むね」と言ってリクに声をかける。
ちょ、ちょっと待ってよ、マスターさん。リクに“あとは頼む”ってなにを頼むの！？　私を！？　留守中、この礼儀知らずの嫌味男に私を見張らせるつもり！？

「あの、マスター？」
「なに？」
いや、なに？　じゃなくて。
とりあえず見張り役を誰か他の人にチェンジしてくださらないだろうか。いや、チェンジじゃなくても、私留守番くらい一人で出来ますし。リクと二人でお留守番なんて言ったら、余計“大人しく”なんて出来ないと思うのですが（ああ、ご褒美の指輪が遠ざかる……）。
「あの、あのね、マスター」
必死で訴える一香に、けれどセイは悪戯に笑って
「行ってきます、のキスでもする？」
からかうように言った。
阿呆か！　誰がおのれとのキスを要求したと言うんじゃ！
「冗談だよ」
毛を逆立て憤慨する一香に、セイはくしゃりと一香の頭を撫でて彼女の頬にキスを落とす。
（やっぱりするのかよ……）
「それじゃ、すぐに帰ってくるからね」
リクと一香を交互に見やって、セイは言った。
部屋を出て行く主に、一香は高速で頬を拭いながらそれを見送り、リクは丁寧に頭を下げて一礼した。

そうして、パタンと扉が閉まった直後。
リクは虫けらをみるような目でもって一香を見下ろし、一香も心の底から嫌悪を込めてリクを見やった。
開戦のゴングが今、鳴り響く。
いざ、勝負！
「あ、リク、イチカ。“私が帰ってくるまで、仲良く”するんだよ」
ガチャ、と扉を開けて戻ってきたセイに命令を受け、リクに飛びかかろうと助走をつけていた一香はビタン！　と小気味良い音を立

て無様に床に落ちた。
（うぅデジャブ……）
「じゃあ、行って来るから。大人しくしていてね、イチカ」
限定で言うセイに、
（さっさと行け、馬鹿マスター！）
一香は床にへばりつきながら悪態をついたのだった。

※※※

木の上に黒い影が三つ、屋敷の離れにあるとある一室を窺うようにして眺めていた。生い茂る葉や木の枝の影に隠れて、部屋の主に見つからぬよう息を潜めている。
（おい、出てきたぞ）
静かに開かれた扉から現れた人物に、黒い影は揃って反応を見せた。
しかし、部屋の主と思われるその人物は一旦部屋から出たあと、また部屋の中へと戻っていってしまった。
（何しているんだ？　あいつ）
（静かに）
首を傾げた影の一つに、別の影が気を抜くなとたしなめる。
しばらくして、また同じ人物が部屋から顔を出し、ようやく長く続く廊下を目的の場所へと歩き出した。
（行ったか？）
（まだだ）
（魔力の気配がする）
警戒に警戒を重ね、完全に彼の人の気配がその場から消えた頃。
（もういいか？）
（いいよ）
（もう気配もしない）
影たちは潜めていた身を露にし、ニヤリと顔を合わせた。

※※※※

「セイ様、お待ちしておりました」
セイは屋敷の離れを出て、数ヶ月ぶりにオークレール家の本邸へと足を運んでいた。オークレール家は、セイが叔父との政権争いに敗れた後、監視する目的で放り込まれた場所である。
使用人たちは久しぶりに顔を見せたセイに一礼して出迎えの言葉を述べた。
離れとはいえ、屋敷内に住むセイを外から来た来客のように振る舞うのは、彼らの意図ではなくセイがそう望むからだ。
監視役と、される側。どんなに長くこの場所に居着いても、決して心を許せる存在ではないのだ、とセイは常に心に留めていた。

「サツキは？」
「庭園の方に。お茶などをご用意してあります」
「あまり長居をするつもりはないのだけど」
「サツキ様のご意向ですので」
それだけ言って、使用人は口を噤む。
セイは手をかざし、下がれと合図を送ると、玄関を横切り外廊下へと繋がる通路へと足を向けた。

小さな森のように草花が自然の姿のまま生い茂る庭園に、ポツンと小さな東屋が設けられている。木々に覆われるようにして存在するそこに、一人の人物の姿を目に留め、セイはそちらに歩み寄った。
「サツキ」
声をかけると、サツキと呼ばれた人物はゆっくりと椅子から立ち上がり、微笑を作った。
「久しぶりねぇ、セイ」
緩く巻かれた美しい黒髪に、パッチリとした二重瞼の黒い瞳。長

い睫が白い頬に影を落とし、形良い唇には真っ赤な口紅が塗られ、妖艶な雰囲気を醸し出している。
オークレール家の長子、サツキ＝オークレール。リクの二人いる兄妹のうちの一人だ。
「なんの用？」
微笑を浮かべながらも、セイはどこか突き放すような響きのする声で言った。
「いやだ、挨拶もなしに用件を聞くの？」
いつからそんなにせっかちになったのよ。サツキは笑って傍らの椅子を引いた。
「とりあえず、立ちっぱなしってのもなんだから椅子に座ったら？」
「残念だけど、早く部屋に戻らないといけないんだ」
セイは首を振ってそれを辞するが、サツキは強引に彼の腕を掴んで椅子に座らせる。
「久々に会ったんだから、そんなこと言わずにお茶の一杯でもつき合ってよ」
サツキは自らもセイの隣に腰を下ろし、テーブルの上のティーセットからポットとカップをとった。オークレール家の庭で取れるハーブティー。湯気の立つそれをゆっくりとカップに注ぎいれながら、
「いい香り」サツキは香りを楽しむように目を細めた。
「私を呼んだのはただ一緒に茶を飲みたかっただけか」
自分のペースに持ち込もうとするサツキに、セイは少し苛立ちながら聞いた。
「それもあるけど、それだけじゃあないわ。お砂糖とミルク……は、入れない主義だったわよね」
確認するように呟いて、自分の分にだけ角砂糖を二つ落としミルクをたっぷり注ぎ込む。何も入れていないストレートの茶の方をセイの目の前に置いてやるが、セイはそれに目を向けることなく、また口を開いた。
「宮廷魔術師は今忙しい時期じゃなかったのか」

人並以上の魔力を持つサツキは、普段は宮廷魔術師の第二師団長として宮廷に仕えている。本来ならこんなところで悠長にお茶など飲んでいられるような身分ではないその人に、どうして帰って来たのかと里帰りの理由を聞くが。
「ええ、忙しいわ。時期がどうとか関係なしに、宮廷魔術師はいつも仕事に追われてる」
しかし、サツキはわざと答えをはぐらかすようにして言葉を紡いだ。
よほど用件が言いづらい内容であるのか、それともセイを足止めしておきたい理由があるのか。
「そんな多忙で、よく里帰りなんてできたな」
セイは用件をせかすも、
「あら、別に部下に仕事押しつけてきたりなんてしてないわよ？ちゃんとした有給休暇、貰ってきたの」
のらりくらりとかわされてしまう。
「叔父上に、何か言われたのだろう」
探るように言うセイに、サツキは微笑を浮かべて茶を口に運んだ。
「当たらずとも遠からずってところかしら。セイ、貴方の子猫ちゃんは元気？」
「なんのことだ？」
今度はセイがとぼける番だった。
セイが、意味が分からない、と首を傾げると、サツキはそれを見て一層愉快そうに笑みを深くする。
「やだわ、とぼけちゃって。いるんでしょう？　貴方の可愛い、可愛い三毛猫ちゃん。見つかったなら報せてくれればよかったのに」
「なにを根拠に」
「貴方がここにいるというのが、なによりの根拠よ。今まで三日と開けず子猫ちゃんを探しに出ていた貴方が、ここ数日ずっと離れにこもっているそうじゃない」
「リクに聞いたのか」

「いいえ。リクを見張らせていた、うちの使用人に聞いたの。あの子、貴方のこと大好きだから」
実の兄妹よりも、セイを慕っているリクは、セイがいる時は必ず日に一度離れに顔を見せる。
「それで、子猫ちゃんを見つけたんじゃないかと思って帰って来たんだけど。酷いんじゃない？　宮廷魔術師の子たちに散々手伝わせておいて、連絡の一つもくれないなんて」
「最近は全く手を貸さなかったくせに、よく言う」
途方もない異世界を渡り歩き、セイは一人だけで一香を探し続けた。
あの日、彼女を見つけた時どんなに嬉しかった事か。
「仕方ないでしょう。私たちも色々と忙しいのよ」
「だったら里帰りなどせず、宮廷に籠もっていればいいじゃないか」
こんな――イチカが見つかった――時ばかり帰ってくるのじゃなくて。
「こっちも都合があるのよ。で、いるのよね？　子猫ちゃん」
「いるとしたら？」
それがなんだとセイはサツキを睨む。
「そんな怖い顔しなくたって、別にとったりしないわよ。まあ、ただちょっと、能力は見させてもらうけどね」
サツキが色っぽくウィンクしてみせたその瞬間、離れの方からガシャンッという大きな音が響いた。
「――っ！　なにをした、サツキ」
すぐさま立ち上がり離れに向かおうとするセイの腕をサツキが掴む。
「ちょっとしたお遊びよ。大丈夫、怪我なんかさせないから」
振り払おうとする手に光の魔法で拘束具をつける。
「セイ。“あの子達”が子猫ちゃんの相手をしている間、貴方には私のお相手を頼もうかしら」
「私に喧嘩を売る気か」

「いやん。喧嘩だなんて、物騒ね。ちなみに、この拘束具はハンデということで」
「師団長が言う台詞か」
「そっちだって、ちゃっかり攻撃用の魔法道具（マジックアイテム）身に着けてきてるんじゃない」
もしかしてこうなること予測してた？
訊ねてくるサツキに、セイは笑みでもって返す。
「憎い男ねぇ」
サツキは口の端を上げてセイを見やった。

05

それは突然の出来事だった。
ガシャンという音を立てて、天井まであった大きな窓のガラスが派手に飛び散る。
相変わらずリクと睨み合いを続けていた一香は、その音に驚いて振り返った。
窓の側にうずくまる三つの黒い大きな影。影たちは、すぐに身を起こし、体中に纏わりつくガラスの欠片を振り払うように身を震わせる。
「犬……？」
長い尻尾に、黒くもふもふした毛皮。ピンと立つ耳は一香の頭に生えたそれに似ているけれど、長い口先としなやかな体躯は猫ではなく狼や犬のそれと同じだ。
ただ、この犬たち、一香が地球にいた頃に見た犬とは一味違っていた。
「俺様、参・上！」
他の二匹が丁寧にガラス片を払っている中、中央の一匹はふると一度だけ身を震わせた後、ビシッと彼なりの決めポーズ――一香たちから見るとただの仁王立ち――をして咆哮を上げた。
「喋った……」
聞き間違い出なければ、今、この犬人の言葉を話さなかったか。
犬たちは三匹とも人の背ほどもある大きな体をしていて、まるで物語に出てくる地獄の番犬のよう。驚く一香に、「なにぼんやりしてる」とどこか緊張した声でリクが言い、その腕を引いた。
「え、わっ」
乱暴だけど、かばうようにして後ろに隠され、よろけた一香は思わずリクの背にしがみつく。
「サツキの使い魔だ。イェルという。黒月の番犬」

「くろ……はい？」
説明してもらって悪いが、使い魔という単語しか理解できなかった。
「使い魔って、私と同じ？」
「ああ」
リクが頷いた時、丁寧にガラス片を払っていた犬たちがようやくガラスを取り終え、こちらを向いた。
「……なんか、ガン飛ばされてるみたいなんだけど」
気のせい？
先ほど雄叫びを上げた犬は獲物を見つけた獣――ええ、獣なんですが――のように青色の瞳を輝かせ、その向かって右側の隻眼の犬はグルルと鋭い牙を剥き出しにして唸った。
そして左側の犬は、
「そこをどいていただけますかねぇ、弟君」
月色の美しい瞳に、明らかな狂気を浮かべて一香たちを見やる。
「リク、知り合い？」
「さっき言っただろう。兄の犬だ」
「お兄ちゃんいたの！？」
意外。そのワンマンぶりは一人っ子かと思ったのに。
思わぬ新事実に驚くも、しかしそんな場合じゃないとピリピリした雰囲気が告げてくる。
「ねえ、私たち狙われてるみたいなんだけど……」
「“たち”っていうか、お前だけな」
「なんで！」
「僕たちの主が、ちょっとキミに用があるんですよ」
月色の瞳の犬が答える。
「主って、つまりリクのお兄さん？」
なんだってそんな人が私に用があるの。
「人違いじゃ……」
一香が呟くと、今度は中央にいる、先ほど咆哮を上げた犬がおか

しそうに言った。
「人違いだって？　白黒茶、それだけ立派な三毛の耳と尻尾を露にしながらよく言うぜ」
なんだ、“人違い”じゃなくて“猫違い”とでも言えばよかったのか？
今にも腹を抱えて笑い転げそうな犬ころに、一香はムッと眉を寄せるが、けれど彼が言っているのはそういうことじゃなかった。
「その珍しい毛色を持つ猫はこの世界に一匹しかいない。大人しく俺たちと来てもらおうか」
なんで。理由を問おうとする一香を無視し、犬たちはこれ以上喋っている暇はないと急速に距離を詰めてくる。
「ちょっと――！」
牙や爪をむき出し、明らかに闘争心丸出しの三匹に、お前ら絶対、狂犬病予防注射なんかしてないだろ！　一香は突っ込みたいのを我慢してリクの手を引いた。
「リク！」
逃げなきゃ。けれどリクは逆にその腕を引いて「邪魔だ、大人しくしていろ」一香を強引に後ろへと追いやった。盾にでもなってくれるのだろうか？　いや、でも向こうは鋭い牙と爪をもった猛犬が三匹もいる。ひょろくて、運動よりも勉強が得意です的な雰囲気を醸し出すリクが勝てるかどうか。
（どうしてこんな緊急事態にマスターはいないのだろう。私を誘拐したときのように、あの光の拘束具でこんなわんこたち首輪をつけてお手でも伏せでも調教してくれればいいのに）
迫り来る犬たち。リクは指につけていたリングを外し、それを犬たちの方へかざした。
「――っ」
ガンッと鈍い音がして、飛び掛ってきていた犬が、見えない壁にぶつかり床に落ちる。
「いってぇ！」

「水晶の守護陣か」
隻眼の犬が唸る。リクと一香の周りには、以前一香がリクに襲い掛かった時できたような薄い膜のようなものができていた。
「おおー」
この手があったか。そういえばこの世界では“魔法”という便利なものがあったんだな、と一香は改めて実感した。
「リク、すごい！」
「はしゃぐな。長くはもたない」
「え？」
「イェルは上位魔族だ。人の手から作った水晶など子供だましみたいなもの」
「そうなの！？」
この犬たちそんな大層な存在なんですか？！
リクの言葉通り、犬たちはめげた様子もなく守護陣を壊しにかかる。
「イェルにこんなものが通用すると思うなよ」
青色の瞳の犬が守護陣を破るようにして爪を立てると、守護陣はぐにゃりと変形する。その部分は一瞬の後にすぐ元通りになるけれど、何度も引っかくようにして攻撃をうけるうち守護陣は徐々に薄く儚くなっていった。
「うわぁぁ、どうしよう、リク！」
「黙っていろ」
リクは、今度は耳につけていたピアスを外し、なにか呪文のようなもの二、三唱えた。
「それもなにかのアイテム？」
首を傾げて観察していると、ピアスは大きさを変えて簡素な銀色の剣になった。
（ふぁ、ふぁんたじー……）
というか、ステッキが花束になる手品のようだ。
呆ける一香をよそに、リクは感触を確かめるように剣を二度三度

振ってみせる。
「戦うの？」
「剣術は苦手だ」
はい……？
「だから、お前のことまで守る余裕はない」
非情にも言い切るリクに、一香は「そんな！」と声を上げる。
守る余裕がないって、じゃあどうしろというのか。一香は魔法も使えなければ、リクのように便利アイテムだってもっていない。ただのか弱い女子高生なのだ。
「セイ様に貰った指輪を使え」
「指輪？」
言われて一香は右手の薬指にはまった指輪を見やった。そういえばセイが出て行く前に貰ったけれど、これも何かのアイテムなのだろうか。
「これ、使い方は？」
「さあ」
「ちょっと！」
「念じれば応える。おそらくはお前の魔力を補助するものだろう」
「魔力を、補助？」
聞き返したとき、ぐにゃぐにゃと既にあやふやなものになっていた水晶の守護陣がパリンッと音を立てて壊れた。
「くるぞ」
「え、嘘！？」
リクが剣を使って囮になってくれる。
その隙をついて部屋の中を逃げまわるが、すぐに三匹のうち二匹の犬が一香を追いかけてきた。
「うわぁぁあん！」
か弱い乙女に猛犬二匹が追ってくるってどういうことなの！
ソファの後ろに回りこみ距離をとろうとするが、犬たちはでかい図体に反し軽々と家具を飛び越え、迫ってくる。獣ならではの柔軟

な動きに、いつ追いつかれてもおかしくないと危機感が募る。
一香は寝室へ続く扉を開けて、その中に逃げ込んだ。ドアを閉めるまもなく二匹が追いかけてくるので、そのまま振り返らずに更に奥にある自室へと逃げ込む。
（どうしよう、どうしよう、どうしよう）
なにか武器になるものを、と一香は咄嗟にサイドテーブルにあった燭台を手に掴んだ。
結構な重さがあるし、みたところ金属でできているので、これで殴れば結構な武器になるんじゃないだろうか。
燭台をもって震える一香に、部屋に入ってきた二匹が鼻で笑う。月色の瞳の犬はリクの相手をしているのか、一香を追ってきたのは青色の瞳の犬と、緑の目をした隻眼の犬だった。
「使い魔がそんなもので勝負するつもりか？」
「無駄。俺たちには通用しない。そんなもの振り回しても、振り上げる前に齧り付いてやる」
（ですよねー……）
そんなこと言われずともわかっているのだが、これ以外に武器になりそうなものがないのだ。
「魔術を使え。地に落ちたとはいえ魔族のはしくれ。それもネイラの至宝というじゃないか」
「三毛猫の力を見せてみろ」
そんなことといわれても、魔術なんてセイに連れ攫われた時、あのへっぽこ火の玉を出したきりで、いまだどう扱うのかなんてさっぱりわからない。
「詠唱はいらねぇ。具体的なイメージを思い浮かべろ。火なら火、水なら水。温度や形、強度やどれくらいの量か。相手を思い通りにしてぇなら、明確な動作を強い意志を持って、言うとおりにさせる」
「強い意思を持って……」
一香は青い瞳の犬の言うことを復唱しながら、ずいぶんと親切な犬たちだなぁ、と首を傾げた。

彼らは今、一香を追い詰める敵だというのに、どうしてその敵が、自ら一香に撃退法を教えくれるのだろうか。なにかの罠か、それともよっぽど親切で間抜けな犬なのか。

（よし、）

一香は右手に嵌った指輪を見ながら、頭に具体的なイメージを思い浮かべた。

犬たちが言ったことは、以前両親に言われたこととほとんど変わらない。『頭に具体的なイメージを思い浮かべて、それを念じて具現化しろ』、おそらく罠だろうが間抜けだろうが、彼らの言うことに偽りはないのだ。

（イメージ、イメージ）

そっと目を閉じて、強く頭に思い描く。攻撃は以前失敗してしまったから、なにか私を守ってくれるようなものを出そう。盾とか守護陣なんかじゃなく、強くて彼らに負けないような頼りがいのあるものを。

「――出でよ、ドラゴン！」

犬たちを指差し、ビシッとポーズを決めた時

「――ギュアアアッ！」

一香のイメージどおり、目の前に、一頭のドラゴンが現れた。

「やった！　成功！？」

初めて魔術が上手くいった嬉しさに、一香は飛び上がって喜ぶが、

「なんだ、これ……」

しかし犬たちは理解不能と首を傾げた。

「なにって、ドラゴンだよ！　ドラゴン！」

ファンタジーの定番。爬虫類っぽい外見に、蝙蝠のような翼。鋭い牙と爪はなにをも貫き、大きな口からはオレンジ色の炎が飛び出し周囲の者を焼き尽くす、物語に出てくる不思議生物の中で最も強く、気高い生き物である。

パタパタと翼を動かし室内を飛び回るそれは、少しばかり一香の好みによって姿を変えられていたが、見た目は物語に出てくるドラ

ゴンそのもの（と、一香は思っている）。ただちょっと皮膚の色がショッキングピンクで、くるりとした愛らしい丸い瞳をもち、頭にちょこんと大きな白い花がつけられているだけのことだ。
「お前、一体どういうつもりでこいつを出したんだ？」
「勿論、守ってもらうために決まってるじゃない！」
まあ、どうせ召喚するなら、かわいい方がいいかと思って多少の軌道修正はしたが。戦いが済んだ後も、ペットとして飼うことのできるお得なドラゴンちゃんだ。
どうだ、すごかろう、と胸を張ると「アホか！」という突っ込みが飛んできた。
まだ攻撃もしてないというのに、犬たちは何故か疲れた様子をして溜息をつく。
「まあ、架空生物を具現化するのは、確かにすげぇことだけど……」
それがこれ？
信じられねぇ、と青色の瞳の犬がうなだれる。
「い、いいでしょ別に。おいで、ドラゴンちゃん」
呼ぶと、ピンク色をしたドラゴンは「きゅるる」一鳴きして一香に擦り寄ってきた。
「かっ、かわいい……」
「そうかぁ？」
「ノイ」
脱力する青い眼の犬に、緑眼の犬がたしなめるように声をかける。ノイとはどうやら青目の犬の名前のようだ。ノイは鬱陶しげに「わぁってるよ」と返すと、一瞬前のくだけた雰囲気はどこへやら、殺気を漲らせて一香を見た。
「じゃあ、おとももできたことだし？　そろそろ鬼ごっこの再開といくか」
牙をむき出しにして言う犬に、鬼ごっこって、もう逃げる場所ないんですけど……、と思いながら後ずさる一香だが、その途端に肩が壁につく。部屋の隅っこに追いやられ、逃げるには犬たちを倒す

ほか術はなくなってしまった。
「ドラゴンちゃん……」
抱きしめていたドラゴンを見やると、ドラゴンはどこか同情を誘う瞳で一香を見上げてきた。
（駄目だ！　こんな可愛い子に戦いなんかさせられない……！）
可愛いものにめっぽう弱い一香は、可愛さを全面に押し出したドラゴンを召喚した事を早くも後悔した。ドラゴンを守る為、もう一度、なにか身を守ってくれるものを出さなくてはいけない。けれど、使い慣れぬ魔術を使った反動か、頭がくらくらとした。
すでに犬たちは臨戦態勢に入っていて、じりじりと迫ってくるのに。
「いくぜ」
飛び掛ろうと床を蹴った犬たちに、ドラゴンを抱きしめ眼を伏せた時――
バシンッ！
「いってぇ！」
「っ……！」
鈍い音がして、犬たちのうめき声が響いた。
（なに――？）
恐る恐る眼を開けた一香が見たものは、
「ま、すたー……」
「ただいま、一香」
にこりと微笑む人は、平然と黒い犬たちを蹴散らしてこちらへやってくる。キャン！　とかギャン！　とか犬たちが悲鳴をあげていたが、そんなことお構いなしで、セイはいつもの笑顔を浮かべて歩み寄ってくる。その笑顔がなんだかとてつもなく恐ろしい気がするのは気のせいだろうか。
「な、なんか怒ってる？」
微笑の裏に隠された感情を窺おうとしたとき、クラリと強いめまいが一香を襲った。

ああ、この感覚。
魔力不足のときに味わった嫌な記憶を思い出しながら、一香はあっという間に闇の中へと落ちていった。

06

「もうっ！　本当にサイテー。なにも本気出すことないじゃないのっ！　制限がかけられているとはいえ、あんたは規格外なんだからね、セイ。一般人のあたしに勝てるわけないのよ」
「一般人って、あなただって宮廷で第二師団長を勤める規格外じゃありませんか」
「リクは黙ってなさい！　私の可愛い子犬ちゃんたちに切り傷つけおってからに……」
「私だって噛み付かれたり、引っかかれたりしたんですよ。その上、水晶を一つ駄目にされました。この代金は後で請求させていただきます」
「ひどい！　肉親に向かって血も涙もないのね、あんたって子は」
「肉親を使い魔に襲わせた人の台詞ですか」
「あら、私は子猫ちゃんの力試しをするように言っただけだもの。邪魔をしたそっちが悪いのよ」
「彼らは連れ去るとか言っていましたが？」
「本気を出させる為の方便よ」
「窓ガラスもこんなに派手に割って……」
「う、うぐ、そ、それは私も予想外だったわ。ノイ、シキ、ユエ！　しっかり片付けときなさいよ！」
「うぇーい」
「了解です」
「はい……」

ガヤガヤと騒がしい喋り声の中、一香の意識は水底から水上へ浮上するように覚醒した。
「う、ん……」

頭を撫でてくれるこの優しい手は誰？　暖かで優しい、まるでお母さんの手みたい。
ゆっくりと瞳を開けた一香は、視界に飛び込んできた青年の姿に、すぐに眼を開けたことを後悔した。
「起きた？　イチカ」
「マ、マスター……」
視界に映るのは見るだけなら眼の保養になる整ったセイの顔。
一体どうしてそんなに接近していらっしゃるのか、甚だ疑問なのですが、聞かずとも答えが分かるような気がするので敢えて訊ねはすまい。
「気分どう？」
うかがうように覗き込まれて、ゆるゆると口を開く。
「だ、だいじょうぶ」
元気なことを証明しようと起き上がろうとするが、クラリと眩暈が生じてそのまま再びベッドに倒れこんでしまった。
うう、力が入らない。
「やっぱり大量に魔力を消費しているみたいだな」
セイは口元に手を当ててなにかを考え込んだ後、片方の手を一香のお腹の辺りへと這わせる。
――な、なにをするつもりだろう。
あられもないセクハラを予想してビクビクと様子を窺っていると、意外にも真面目な顔で何事か唱え、そっと円を描くように腹部を擦った。
「なに……？」
手の触れている部分からなにか暖かいものが注ぎ込まれ、ほっこりとしたものがお腹を伝って全身に満ちていく。まるで温泉につかったときのように心地良い痺れを伴った感覚。
「あったかい……」
「私の魔力の一部を、イチカに移した」
言って、チュッとでこチューが降ってくる。

ああ、結局セクハラはするのね（というか、キス以外にも魔力を移す方法あるんじゃないか！）。
けれど、セイの顔がどこか切なげな様子でこちらを見下ろしてくるのでなんだかいつものように抗議する気にはなれず窺うように彼を呼ぶ。
「マスター？」
「イチカ……」
どうしたの？
首を傾げればまた優しく頭を撫でられる。
幼子をあやすような仕草に、どうしてか不安が込み上げもう一度その名を呼ぼうとしたとき、ゴンゴンッ！　とやけにごつい遠慮のないノック音が響いた。
「ちょっとセイ！　入るわよ！」
ヒステリックな声で言って部屋に入ってきたのは、なんとも背の高い美人さん。
ふんわりとカールした黒い髪に、同色の瞳。そして白い肌に赤い唇が印象的な綺麗系美人はやけにご立腹な様子で一香たちの方へやってくる（セイが座っているのでわからないが、もしやこの人セイよりも背高いんじゃないか？）。
すっきりとした薄黄色のドレスに身を包み、上にカッチリとしたジャケットを羽織ったその姿はまるでどこかの令嬢のようで。
一体何処のお嬢さんだろう。もしかしてセイの恋人？
訝しい視線をそのままセイに投げかければ、セイは一つ溜息を吐いた後やや疲れた様子で口を開いた。
「イチカ、リクの兄のサツキだ」
「へえぇ！　この人が、噂のリクの“おにいちゃん”……？　って、うん？」
ちょっと待ってよ、マスター。この人、どっからどうみても女なんだけど。
眼を丸くする一香に、“サツキ”と呼ばれた麗人はにっこりと妖

しげな笑みを浮かべた。
「私が美しいのは分かるけど、外見に惑わされちゃあいけないわよ、子猫ちゃん」
言われてみれば、声がすこしばかり低い。
でも、だけど。
「サツキ＝オークレール。オークレール家の長子にして、リクのお兄ちゃんやってまーす。普段は王宮で宮廷魔術師第二師団長を勤めているんだけど、今は有給とってバカンス中なの。よろしくね、子猫ちゃん」
にっこりと笑って一礼するサツキは外見だけじゃなく、言葉遣いや立ち居振る舞い、仕草その他全て、女である一香よりもよほど女らしい（く、くやしい……！）。
ポカンと口を開けたままの一香にサツキはフフと笑い、セイはそんな彼女――否、彼の様子に眉を寄せた。
「気は済んだだろう。望みどおり会わせてやったのだから、さっさと屋敷を修復して城に帰れ」
「あら、冷たい。勿論屋敷はきちんと修復するわ、私の子犬ちゃんたちがね」
「……イェルか。厄介なものと契約をしたものだ」
「珍しい、心配してくれるの？」
「馬鹿か」
吐き捨てるように言うセイに、サツキはふふと嬉しそうな笑みを漏らす。
マゾだ、この人。
「そんなにつれなくされると燃えるじゃない。あ、そうだ。久しぶりに里帰りしたんだし、もうしばらく屋敷に滞在しようかしらん」
「は？」
「別にいいでしょう。私の実家にどのくらい居座ろうと、私の勝手だもの。長期休暇の届けは出してきたし？」
きーまり、とばかりに手を叩くサツキ。セイはそれを氷点下の瞳

で睨んだが、サツキは「いやーん、こわぁい」とふざけたように（というか明らかにふざけている）身をくねらせるだけで効果はない。
――はあ、まさかこんな美人さんが男の人だったなんて。世の中分からない。名前だって“サツキ”で、女性的な感じだし言われなきゃ分かるはずないじゃん。
男二人がにらみ合う中、ようやくショックから立ち直りかけた一香は、ふとあることに気づき首をかしげた。
そういえば“サツキ”って……。
『イェルという。黒月の番犬』
『“兄の犬だ”』
狂犬に襲われたときのリクの言葉が蘇る。
――兄の犬。リクの兄といえば、この男だか女だかわからない“サツキ”さん。……ということはつまりあの猛犬をけしかけたのってこの人！？
「いにゃあー！」
信じられない！　こんな綺麗な顔してかよわい乙女を襲わせるなんて。外道、外道だ！
「あら、どうしたの？　子猫ちゃん」
いきなり奇声を発し彼から距離をとった一香に、サツキはキョトンとした表情を浮かべこちらを見つめた。
「マスター！　この人追い出して！　最低！」
「言われなくてもすぐに追い出すよ、イチカ」
珍しく一香の要求を上機嫌で飲むセイ。
結託した二人に、サツキは不機嫌そうに顔をゆがめ口を尖らせる。
「いきなりひどいわ。セイはともかく子猫ちゃんまで私を追い出そうとするなんて」
「当たり前でしょう、貴方は二人にとって害になるようなことしかしていないじゃないですか」
「リクは黙ってなさい！」
ヒステリックに言うサツキにつられて目を移せば、いつの間に来

たのかリクが部屋の入り口に立っている。
「リク……」
ぱっと見、目立った外傷は無い。
――無事だったんだ。
天敵だったとはいえ、一時は供に戦った仲だ。元気そうなリクの様子にほっと胸を撫で下ろせば、ひょいとその横から別の存在が顔を出した。
「あるじー、部屋の掃除あらかた終わったけど、次はどこ掃除すりゃいいわけー？」
黒い癖のある髪に青色の瞳。二十前後のその若者は、ややくたびれた様子でサツキに問いかけた。
……なんだろう、この感じ。
「イチカ？」
無意識にセイの背に隠れた一香に、セイは首を傾げて彼女を見つめる。
「マスター……」
どうしてだろう、確かに見覚えの無い人なのに、なんか怖い？
毛を逆立てて首を振る彼女を、セイは静かに抱き寄せて頭を撫でてくる。一香は珍しくそれを振り解くことなく彼にしがみつく。体中から湧きあがる恐怖。これは、一体なに？
「お？　おお！」
と、震える一香に気づいた若者はＫＹにもパアッと表情を明るくさせ、近づいてくる。
「なんだ、お前やっと気がついたんだなー、気分どうだ？」
「へ？」
きょとんと固まる一香に、若者は気づかない様子でにっこりと笑って言葉を続けた。
「悪かったなー、命令とはいえ初の三毛猫相手に俺らもテンション上がっちゃってさー」
「へ？　はい？」

一体彼はなんのことを言っているのか。一香はただただキョトンとして若者を見つめる。
「あのどらごん？　とかいうピンクのやつも、役には立たなかったけど架空生物を具現化するなんてやっぱり三毛猫だな！　すげーよ」
ピンクのドラゴン？
ああ、そういえば私が出したあのいたいけなドラゴンちゃんは一体どうなったんだろう？　あの後、私は意識を失ってしまったけれど、あの子は無事だろうか。キョロキョロと部屋を見回してみるも、残念ながらあの子の姿は見当たらない。
どこに行っちゃったんだろう。犬に怯えて、どこかに隠れているんだろうか。
て、そういえばこの人（若者）、どことなくあの犬たちの一匹に似ている。髪や眼の色といい、喋り方といい、最初にポーズ決めて部屋に飛び込んできたあの馬鹿犬にそっくりだ。
「……ノイ、子猫ちゃん引いているわよ」
「うええ？　俺、しっかり謝ったぜー？」
「ノイ……？」
って、そういえばあの馬鹿犬の名前もノイじゃなかったっけ？
「もう一度ちゃんと謝んなさいな」
「ええええー……。しょうがねえなあ。悪かったよ、急に襲ったりしてさ」
ペコンと頭を下げてみせる若者。
やっぱりあの時の馬鹿犬だったのか！
野生の勘、おそるべし。通りで嫌な感じがするわけだ。人型になってもにじみ出る狂気！　（というか、使い魔って人型にもなれるのね……）。
「さ、謝罪が終わったら、さっさと掃除に戻って、戻って。部屋が終わったら次は庭の方お願いねー」
「うえーい」
渋々といった感じでノイは部屋を去っていく。

全く、躾のなってないワンコだな！　今度会うときまでに狂犬病の予防注射受けときなさいよ！
「喧しい犬だ」
珍しくリクの言葉に同感である。
「そこが可愛いんじゃない。三匹とも個性があって面白いのよ、なによりそこいらの使い魔より断然強いし」
「その分代償も大きいだろう」
「それは、まあ。私くらいの人間じゃなきゃ扱えないでしょうねえ」
セイの言葉に、サツキはどこかはぐらかすように答える。
なんだろう、代償って。使い魔を使役するにはやっぱりそれ相応の対価が必要なんだろうか……？
でも、私セイになにかもらったことってあったかな？　魔力、とか？
「あの子達がいるおかげで重宝しているわ。仕事にも有利だし、陛下も……っと、王宮の話は興味ないわよね。ま、とにかく強い使い魔がいればそれだけ便利なことも多いわ。あなたもそう思わない？　セイ」
同意を求めるサツキは、けれど視線は一香の方へと向けて微笑んだ。
「で、話は変わるんだけど。一つ提案があるの」
「拒否する」
間髪いれずに即答。なんか、マスターってこの人（サツキ）に対すると性格変わるな……。
「いやん、一応話は最後まで聞いてちょうだいよ」
「断る。お前の話などろくでもないことに決まっている」
「そりゃそうだけど」
否定しろよ！
「でも、今回の提案は私からじゃなく、陛下からよ」
「は……？」
「『子猫ちゃんの実力を確かめた上、必要であれば世話役としてつ

くこと』。今後、私が子猫ちゃんの家庭教師としてつくから、よろしく」
バチンとウィンクをかましてくるサツキ。
は？
はあああ？！
「却下！」
「いやだわ、子猫ちゃん。これは陛下直々のお達しだからいくらイヤでも拒否することはできないわ」
「ちょっ！　勝手に決めないでよ」
こんな変な人が家庭教師だなんて絶対嫌！
「勝手にもなにも、もうこれは決まったこと。残念だけど諦めて」
「ううう」
嫌だ。セクハラマスターのお勉強教室も嫌だけど、この得体の知れない人の方がもっと嫌！　しかも、この人が家庭教師ってことは凶暴な猛犬三匹も漏れなくついてくるわけで。
ちょっとマスター！　黙ってないでなんとか言ってよ！
けれどセイはただサツキを睨むだけで、なにも言わない。
「マスター……」
やがてセイはふうと吐息を一つ落とすと、一香の頭をポンッと撫でた。
「イチカ、嫌なことがあったらすぐに言いなさい」
現在進行形であるんですが！
暴れる一香を抱きしめて一言、
「辛い時は私が癒してあげるから」
「だが断る！」

こうして、一香の異世界生活に厄介な登場人物が複数名加わったのでした。
お父さん、お母さん。私一体どうなっちゃうの。

※補足※

ちなみに、ピンクのドラゴンちゃんは一香の意識が途切れた瞬間に魔法がとけて消滅しました。合掌。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7339o/

リオシュタルテの使い魔

2011年10月2日09時26分発行